

原 著

エンパワメント実践の構造 —ピアサポーターの事例をとおして—

神 林 ミユキ*¹

要 約

精神障害があるピアサポーターが活動を継続することは容易ではない。様々なストレスに対応しながら似た課題に苦しむ仲間を支えることは、社会的次元のエンパワメントを実現した当事者にこそ可能と考える。かれらのエンパワメントを支えたソーシャルワーカーによる実践の構造の可視化が本研究の目的である。4名の活動を継続するピアサポーターを、10年以上担当する精神保健福祉分野のソーシャルワーカーに、これまでの支援についてインタビューをおこない、質的データ研究法を用いて分析した。分析の結果、エンパワメントの個人的次元・対人的次元・社会的次元それぞれのストーリーが描かれた。この結果にもとづき、次の3点を考察した。1点目は、3つの次元が個人・対人・社会という順序で展開する意義である。2点目は、3つの次元は各々で完結するものではなく、連続性や重複性を持つ関係である。3点目は、次元の進展とともに目標とする自己肯定感と、関係する他者が拡張する様相である。これら3点の特性をもつエンパワメント実践の構造を図に示し可視化した。

1. 緒言

障害領域においてピアサポートは、「障害のある人生に直面し、同じ立場や課題を経験してきたことを活かして仲間として支えること」と定義されている¹⁾。精神保健福祉分野でピアサポートが注目される契機は、2003（平成15）年の厚生労働省精神保健福祉対策本部中間報告「精神保健福祉の改革に向けた今後の対策の報告」^{†1)}である。その後、2007（平成19）年の相談支援体制整備特別支援事業のピアサポート強化事業や、2015（平成27）年の精神障害者地域移行・地域定着支援事業^{†2)}におけるピアサポーターの位置づけにみられるよう、ピアサポーターの養成や活用推進の方策は増加してきた。また、2016（平成28）年から、ピアサポーター養成研修のカリキュラムやテキスト開発、活動の有効性調査など、ピアサポーターの質を担保する取り組みがおこなわれた。その結果、2020（令和2）年には地域相談支援事業に障害者ピアサポート研修事業^{†3)}が新設され、研修を受けたピアサポーターの活動を評価するピアサポート体制加算^{†4)}やピアサポート実施加

算^{†5)}が設けられた。以上のような政策的なバックアップをうけ、障害領域におけるピアサポート活動の認知や信頼は、一定の水準に到達したと考える。

一方で、ピアサポーターをとりまく実態には、活動普及推進策では対応できない課題がある。2015（平成27）年から三重県ではピアサポーター養成事業がおこなわれ、研修を修了した現役ピアサポーターたちが自主的に、定期的なミーティングを開催している。このミーティングに数回出席した後、活動を中止するピアサポーターが多く存在する。活動を中止する理由は、利用者の話を聴くストレスや自身の支援活動に対する不安、孤立感などがあげられる^{†6)}。ピアサポート活動は、ピアサポーター自身が成長できる²⁾指摘されるが、ピアサポーターへの負担も大きい。始めた活動をやむなく中止にすることは、利用者に対する不利益だけではなく、ピアサポーター自身に失敗体験として残るリスクも高い。

こうした実態から、ピアサポート活動の普及推進施策が有用に展開されるためには、自らの経験を活用して仲間を支援するピアサポーターの状態に着目

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
(連絡先) 神林ミユキ 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-mail : miyu-k@mw.kawasaki-m.ac.jp

する必要があると考えられる。精神保健福祉分野のピアサポーター研究は、ピアサポーターとの協働による効果的な地域移行支援の報告^{3,6)}や、ピアサポーター自身のリカバリーに焦点を当てた報告⁷⁻¹⁰⁾が大半であり、活動を継続できるピアサポーターの状態に関する直接的な示唆は得られていない。しかし、ピアサポーターを支援の担い手という側面ではなく、自らの疾患や障害に関する経験を活用できる次元までエンパワした当事者¹¹⁾ととらえる視点は得られている。

エンパワメントとは、当事者が奪われた力を主体的に取り戻すことである。その力を自身の生活課題解決にとどまらず、抑圧を生む社会構造の変容を求める当事者による活動¹²⁾のひとつにピアサポート活動がある。つまり、活動継続の要因のひとつは、ピアサポーターが一定のレベルのエンパワメントに到達していたか否かにあると仮説的に考えた。

すでにソーシャルワーク領域のエンパワメント研究では、「多次元性」「ストレンクス（パワー）」「主体性」をキーワードとするエンパワメントの定義が提唱され¹³⁾、実践のガイドとして個別的・対人的・組織的・社会的次元に分割したエンパワメント・アプローチが構築されている^{12,14)}。しかし、精神障害者のエンパワメントに関する実践研究^{11,15)}は、精神医学・看護領域^{16,19)}と比較して著しく少ない。特に、ピアサポーターのエンパワメントを探求した研究は、管見の限り論文が一本のみであった¹¹⁾。

エンパワメント実践の可視化は、長期に及び多様な相互作用への言及が必要となるため難しい。一部に焦点をあてると実践全体の把握が難しくなり、全体像を提示すると具体性が乏しく抽象性の高い結果提示となる。そこで本研究では、ピアサポート活動を継続する4名の当事者に対する、ソーシャルワーカーによる10年以上におよぶエンパワメント・アプローチに調査対象を絞り、社会的次元に到達したピアサポーターを支えたエンパワメント実践の把握を試みることにした。また、実践モデルとして活用されるエンパワメント・アプローチの3つの次元を理論枠組みとして、実践構造の可視化をめざす。

本研究の目的は、ピアサポーターが社会にはたらかける活動を継続する力の獲得を支えたソーシャルワーカーによる実践を、エンパワメント・アプローチで提示された個別・対人関係・社会的次元に依拠して可視化することである。この前提には、ピアサポートの普及推進策の有効な展開に不可欠な、継続して活動できるピアサポーターはエンパワメントを実現しているという仮説がある。本研究により、ピアサポート活動に対する期待や施策が資源という側

面に偏らず、ピアサポーターのエンパワメントを支える一助としての意義も正しく認知されることを期待している。

2. 方法

2.1 調査対象

4名のピアサポーターが在籍する「社会福祉法人名張育成会 名張市地域活動支援センターひびき」（以下、センター）は、三重県名張市で2004年8月より事業を開始し、多様なプログラム活動や個別相談を通じて利用者及び家族の支援を展開している。本研究の調査対象は、センターに所属する1名のソーシャルワーカーに対しておこなったインタビューデータである。4名のピアサポーターのセンター利用開始から現在までの間を、一貫して担っている。担当ソーシャルワーカーの経験年数は25年、社会福祉法人名張育成会在籍年数は14年である（2022年4月現在）。

2.2 データ収集

担当ソーシャルワーカーに、2017年11月～2018年12月まで5回にわたり半構造化面接を実施した。インタビューは、研究チームのメンバーであるセンター管理者が実施した。管理者は、担当ソーシャルワーカーとともに4名のピアサポーターの利用開始時からの変化を把握している。インタビューは、4名のピアサポーターの支援記録を参考資料として用い、一人ひとりへの支援内容を時系列で聴き取りを行った。インタビューガイドは、以下の3点である。①：ピアサポーターとしての選定・活動に影響を与えたと考える支援場面、②：①の支援場面におけるアセスメントと具体的なアプローチ、③：②のアプローチの結果や自己評価。インタビューは、担当ソーシャルワーカーの同意を得てICレコーダーに録音し、文字データ変換後分析をおこなった。

2.3 分析方法

担当ソーシャルワーカーの支援行為の意味を文脈に沿って把握し、エンパワメントに関する理論を用いて正確に分析するために、佐藤郁哉が提唱するコーディングによる脱文脈化・再文脈化による質的データ分析法²⁰⁾を用いた。

佐藤は、量的研究に比べ質的な研究法が抱える知見や方法の厳密性の問題を指摘し、質的データが示す意味世界を研究として発表する方法論を提示した。それが、質的データ分析法である。その原理は、ソーシャルワーカーが語る「現場の言葉」と、先行研究が構築してきた「理論の言葉」を、研究者が架け橋となり何度も往復することで意味を正しく解釈するというものである。

分析の手順は、文字化したインタビューデータからソーシャルワーク機能が発揮されていると判断される部分に、具体的な支援行為を縮約した定性的コードを付して文脈から切り離した。定性的コードは分析のプロセスを通じて、複数回テキストデータに立ち返り確認・修正をおこなっている。次に、定性的コードの支援行為の類似性に着目して分類してデータベース化をおこなった。その後、事例—コード・マトリックスを作成しストーリー化を試みるのが一般的であるが、4名のピアサポーターに対する支援がエンパワメント実践であることは検証されているため¹¹⁾、エンパワメント・アプローチにおける個別的、対人的、組織・社会的次元の支援目標や課題を認識文脈として用いてストーリー化をおこなった。

分析作業は、社会福祉法人名張育成会に所属する、有資格者を含むソーシャルワーカー5名の研究会メンバーが参集し、2018年10月～2019年12月まで14回にわたり実施した。分析が恣意的にならないよう、研究メンバーによる議論を重ねるほか、分析作業の途中で担当ソーシャルワーカーに確認をおこない、意識の防止に留意した。

3. 結果

3.1 定性的コード

4名のピアサポーターに対する10年以上に及ぶ支援に関するインタビューデータから、ソーシャルワーク機能が発揮されていると判断された文書セグメントは267抽出された。抽出には、平山ら²¹⁾が示したソーシャルワーカーに求められる12の役割を一部修正した次の指標を用いた。「1.問題を新しい視点からとらえることを促進」「2.改善方法を考えることを促進」「3.自己肯定感の向上をサポート」「4.社会資源活用機会拡大」「5.サービスの利用中断を予防」「6.仲間と問題を共有し助け合える機会提供」「7.家族内コミュニケーションの促進」「8.職員間の協働体制づくり」「9.利用者が使いやすい組織づくり」「10.職員間・組織間の仲介的役割」「11.利用できる資源情報の獲得」「12.必要な社会資源の開発」のうち、項目11以外は該当する支援が抽出された。

267のセグメントそれぞれに対して内容を縮約する定性的コード化を付し、それらの類似性から抽象化を図る概念化カテゴリーを作成した(表1)。最終的に概念的カテゴリーは32にまとめられた。作業経過で、繰り返し定性的コードの適切性や、概念的カテゴリーの名称や分類の妥当性を確認した。

表1 定性的コード・概念的カテゴリー作成の一例

文書セグメント	定性的コード	概念的カテゴリー
・本人が《気分の》波の話をするように、図を描いたり、自分がどうなりたのかってという話を本人にしてもらおう (A-177)	・コンディションを図で描くよう促す ・自分の目標を話す	自分の状態を客観視できる助言・自覚を促す
・本人が落とし込める言葉で職員が表現する、フレーズを残すというのがすごく効果が出たと思いますね (A-212)	・本人が落とし込める言葉を職員が代わりに表現する	
・面談で自分が取っている行動がどうなのかというところをもう一回面談のテーブルの上に出して、やってきたことを少し客観的にみる練習を。気分の波を図にしたり、その日にとった行動を図に書いて再現し合ってみたり… (B-118)	・面談で自分の行動を客観的にみる練習 ・気分の波や行動を図にする	
・上司に対して傍から聞いたらヒヤッと物言いをしたりとか、そういうことが多かったので、そのたびにピアサポーターの誰かのためにという立ち位置と立ち返るべきモラルを共有することを繰り返しました (B-146)	・上司に失礼な物言い ・誰かのために行動することに立ち返る	
・服薬が必要だということや精神科は良くなったように見えてもかかり続けたほうがよいという意識が、職員がつらさを聴く中で、ご本人自身が徐々に理解され始めて… (C-39)	・服薬や通院継続の必要性の認識 ・職員がつらさを傾聴する	
・かっとなるとすぐ投げやりになり、「死んでやるとか家を出る、センターを辞めてやる」などすぐ口に出してしまうんですが、ひとしきり荒れた後「自分がどうなりたいの。自分をどうしたいの」と何度も問いかけて、「こんな自分を変えていきたいけど、思うようにいなくてかっとする」ということをぼつぼつと話してくれるようになりました。(D-44)	・カッとすると投げ出す発言 ・どうなりたいのか、どうしたいのか問う ・自分を変えられないことへの苛立ちを語る	

文書セグメント内の《 》は内容を変えないよう留意し、筆者が加筆した

3.2 データベース化とストーリー化

概念的カテゴリーの支援行為や支援対象の類似性に着目して、データベース化をおこなった。それらを、ソーシャルワーカーとクライアントの二者間でおこなわれる個人的次元、グループを活用した支援をおこなう対人的次元、センター外の人や機関とのかわりをおこなう組織や社会的次元で配列をおこなった。概念的カテゴリーは3つの次元に配列後、概念的カテゴリーをストーリー化のためにさらに抽象化しまとめた分類を作成した。2つのセグメントがいずれの次元にも配列できず、外れ値として取り扱った⁷⁾。

本稿の文中において、分類は [], 概念的カテゴリーは「 」, インタビューデータからの引用は () で示す。

3.2.1 個人的次元

エンパワメント・アプローチにおける個人的次元の支援の特徴は、クライアント自身の自己肯定感の向上をめざした傾聴やパートナーシップの形成である¹²⁾。個人的次元に分類された18の概念的カテゴリーには、191の文章セグメントが含まれる。また、[リスク管理][指導的かわり][動機づけ][認

知変容の促進][機会提供][環境調整]の6つの分類にわけることができ、傾聴やパートナーシップ形成では説明が難しいソーシャルワーカーによるはたらきかけがあることが明らかになった。

これらの分類から描いた個人的次元のストーリーは、パワーレスな状態にあるクライアントを[リスク管理]や[動機づけ],[環境調整]等によりサポートする一方、不適切な言動や思考に対する[指導的かわり]や、ネガティブな考え方を変える[認知変容の促進]等、本人に変化を求める支援をおこなうというものである。そして、仲間との協働へ移行が可能になる自己信頼が得られると、グループに参加する[機会提供]が行われ、対人的次元へと移行していく。

3.2.2 対人的次元

対人的次元は、他者との相互支援を通じて仲間意識をもつことをねらいとして、共通の課題を持つ仲間とのグループ作りや運営がおこなわれる¹²⁾。この次元には、3つの概念的カテゴリーが分類された(表3)。3つのカテゴリーは、[グループ準備]と、活動開始後の[相互作用の促進]の2つに分類された。

対人的次元におけるストーリーは、ピアサポー

表2 エンパワメントの個人的次元に分類される支援

分類	概念的カテゴリー	セグメント数
リスク管理	病状が悪化した際の助言	13
	グループ活動からの離脱の予防	8
	危機的状況での支え	9
	サービス利用継続のための訪問支援	2
指導的かわり	自分の行動や考え方, 生活リズムについての助言	14
	不適切な言動に関する指摘	6
動機づけ	就労意欲を維持するための面談	9
	本人の気持ちを支持的に傾聴	21
認知変容の促進	自分の状態を客観視できる助言・自覚を促す	25
	自分の状態や考え方, 言動の肯定的側面への気づきを促す	17
	社会的活動に対する肯定的評価	6
	病気や失敗などの経験の意味づけ	7
機会提供	仲間との活動を通じて肯定感や自信を得る機会の提供	8
	グループ活動参加機会の提供	4
環境調整	職場との連絡・相談・調整	20
	家族との連絡・相談・調整	12
	医師との連携 (医療・福祉) サービス利用についての助言	5

表3 エンパワメントの対人的次元に分類される支援

分類	概念的カテゴリー	セグメント数
グループ準備	相互作用による効果を見据えたグループメンバーの設定	1
相互作用の促進	グループメンバー間の相互理解の促進	2
	グループメンバーから刺激を受ける環境の設定	2

ター間に共感や相互支援が生まれるよう、[グループ準備]の段階でメンバーを選定し、場づくりやファシリテートによる[相互作用の促進]と描いた。

個人的次元と比較し、対人的次元に該当するカテゴリーが著しく少ない理由は、2点考えられる。1点目は、4名各々に対する支援経過を聴き取ったため、担当ソーシャルワーカーがグループへのはたらきかけを語りにくいインタビューだったことである。2点目は、対人的次元で参加をしたSST (Social Skill Training)やWRAP (Wellness Recovery Action Plan)等のプログラム活動は、すでにメンバーが主体的に運営するグループが成熟していたため、ソーシャルワーカーによるはたらきかけが少なかった可能性である。

いずれにしても、4名ともピアサポート以外にもグループでおこなう活動機会をもち、ソーシャルワーカーはその機会の活用に意欲的である。

3.2.3 社会的次元

本稿では、エンパワメント・アプローチで示される組織の次元と社会の次元をあわせて社会的次元としている。組織の次元は、当事者が自分の権利に気づき主張すること、社会の次元では当事者が社会参加し社会変革にむけて動くことが指標とされている¹²⁾。いずれも、当事者が社会と自分の関係を考え行動するステージである。

センターでは、ピアサポート活動にかぎらず、利用者に対して多くの社会活動の機会提供をおこなっている。社会的次元に該当した概念的カテゴリーは11である。概念的カテゴリーを、活動内容にとらわれず支援内容で分類すると、[参加・継続の促し][活動準備][ふりかえりの促し]に分類された。

社会的次元の支援は、個別性に沿った活動に誘い継続して活動ができるよう個別・グループにはたらきかける[参加・継続の促し]のほか、社会への発

信が失敗体験にならないよう入念な[活動準備]をおこなう。活動後は、[ふりかえりの促し]をおこない、ピアサポーターが社会活動をポジティブな経験として意味づけ、自信をもてるようはたらきかけるというストーリーを描いた。

4. 考察

分析結果により得られたストーリーから、ピアサポーターに対しておこなわれたエンパワメント実践の構造に関する3点の考察をおこなった。

4.1 個人・対人・社会的次元の順序性

考察の1点目は、3つの次元の順序である。エンパワメント・アプローチも、個人から対人関係、組織、社会という順序で次元の展開を示している¹²⁾。実態と理論が一致したといえる。

この順序に意義があることは、ピアサポート活動の参加を促す時期に見ることができる。個人的次元には、個人に既存の社会資源を紹介する[機会提供]が含まれる。一方で社会的次元には「ピアサポーターWG (ワーキンググループ) への参画機会の提供」が分類されている。カテゴリーや分類の名称は類似するが、定性的コードを抽出した文書セグメントに戻ると、表5に示したようにその文脈に大きな違いがある。

個人的次元の[機会提供]に分類された12のデータは、仲間との相互支援を期待する文脈や、個人に還元されるプログラム活動の成果を期待した文脈に含まれていた。グループ活動は他のメンバーに影響を与えるため、個人が不安定な状態のままグループに参加することは避けなければならない。つまり、個人的次元が対人的次元より前に実施される必要性を読み取ることができる。

一方で、社会的次元の[参加・継続の促し]に含まれる「ピアサポーターWG (ワーキンググループ)

表4 エンパワメントの社会的次元に分類される支援

分類	概念的カテゴリー	セグメント数
参加・継続の促し	外部機関と連携した啓発活動への参加機会の提供	12
	社会的な活動の意義確認による活動参加への動機づけ	10
	ピアサポーターWG (ワーキンググループ) への参画機会の提供	11
	精神疾患・障害の啓発と経験談の発表機会の提供	8
	啓発活動への参加を促す	5
	家族勉強会での体験談の発表機会の提供	3
活動準備	啓発活動の発表原稿作成のための確認・助言	12
	歌を通じた啓発活動と自主企画の実施	3
	行政主催会議の事前説明要請	2
ふりかえりの促し	啓発活動へのふりかえりを促す	5
	活動の経験をメンバー間で共有	4

への参画機会の提供」の11のデータは、仲間と行ってきた活動が誰かに役立つことや、社会的な役割を担う自覚を促す文脈から抽出されている。つまり、社会的次元の前提として対人的次元においてグループ活動の実施が必要である。

これらのことから、個人・対人・社会的次元の順序で実施されたソーシャルワーカーによるエンパワメント実践が、活動継続するピアサポーターに実施されていたことが明らかになった。

4.2 個人・対人・社会的次元の複合性

2点目は、3つの次元の重複性に関する考察である。3つの次元は、ひとつの次元が完結してから次の次元が始まるものではなく、1点目の考察で示したプロセスに沿い、次々と積み重なるように展開することが分析作業中に生じた問題により明らかになった。

概念的カテゴリーを3つの次元に分類する分析作業の過程で、いずれの次元に分類するか判断に迷う

場面が度々みられた。その原因は、研究メンバー間の力量や評価の相違だけではなく、事例—コード・マトリックス法¹⁶⁾を活用せず、エンパワメント・アプローチから個人・対人・社会的次元をストーリー化の枠組みとして用いた影響が考えられる。本研究では、便宜上いずれかの次元に分類し分析を進めたが、この問題から3つの次元は各々が完結する関係ではなく、重複する可能性について考察をおこなった。

2つの次元にかかる支援という解釈が妥当なセグメントが一定数存在していた。個人的次元に分類した概念的カテゴリーのうち3、対人的次元のうち2、社会的次元のうち5が分類に苦慮した(表6)。つまり、32のうち10の概念的カテゴリーが、2つの次元のいずれとも分類が可能である。

例えば、個人と社会的次元の分類に悩んだ[啓発活動へのふりかえりを促す]の概念的カテゴリーに含まれる5のセグメントに付された定性的コードは、

表5 個人的次元と社会的次元における[機会提供]の文脈の比較(一部掲載)

個人的次元	社会的次元
<ul style="list-style-type: none"> ・自己肯定感を持ってもらいたい方、または自分の態度とか行動に対して多角的な感覚をもってもらいたい方をグルーピングしてWRAPをやってみようじゃないかと... (A-202) ・「優秀だね」と言われたという気持ちは、職場でのぼすのは難しいかなと思ったので、社会的活動にシフトしていきたいなど... (B-41) ・グループメンバーの調子が悪いときにフォローしてくれて(中略)お互い様だからお手伝いしますよという感じで言ってくれていました (C-18) ・WRAPを通して同じグループの仲間からいい影響をD氏が受け取ってほしいなど (D-34) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアサポートもグループ活動をやっている、そういう社会的信用の援助にあるんやでってことを伝えると... (A-278) ・家族以外にも頼れる人がいる、気持ちを聞いてもらえる人がいるっていうのが大事なんだというB氏の意見というのが、ご家族や当事者にとっては大きな助けるになる意見だろうと... (B-139) ・シンポジウムの後の反響に対して(中略)ご本人が動かれた様子を見て、「この方はひとつ支援者のステップを踏んだというのがすごくあって、ピアサポーターするなら絶対C氏」(C-63) ・なりたい自分に近づく方法として、グループ活動やWRAPグループ、高校生の啓発なんかも含めステップアップしてきた中で、ピアサポーター (D-72)

表6 分類に苦慮した支援(重複掲載)

苦慮した次元	分類した次元	概念的カテゴリー	セグメント数
個人/対人	個人	グループ活動からの離脱の予防	8
	個人	仲間との活動を通じて肯定感や自信を得る機会の提供	7
	個人	グループ活動参加機会の提供	3
	対人	相互作用による効果を見据えたグループメンバーの設定	1
	対人	グループメンバーから刺激を受ける環境の設定	2
個人/社会	社会	啓発活動の発表原稿作成のための確認・助言	12
	社会	社会的な活動の意義確認による活動参加への動機づけ	10
	社会	啓発活動へのふりかえりを促す	5
対人/社会	社会	活動の経験をメンバー間で共有	4
	社会	歌を通じた啓発活動と自主企画の実施	3

(啓発活動へのネガティブな感情) (負担だけどもめることは不安) (活動中の発言内容のふりかえり) (聴き手からの好意的な反応) (活動後すぐに支持的フォロー) (個別・グループ両方でふりかえり) である。これらの定性的コードには、ピアサポーターの不安に対応する個人的次元の支援と、仲間と相互評価する対人的次元、啓発活動の質の向上や継続をめざす社会的次元の支援が分かちがたく含まれている。

これらのことから、エンパワメント実践の3つの次元は、連続性と重複性をもつことが明らかになった。

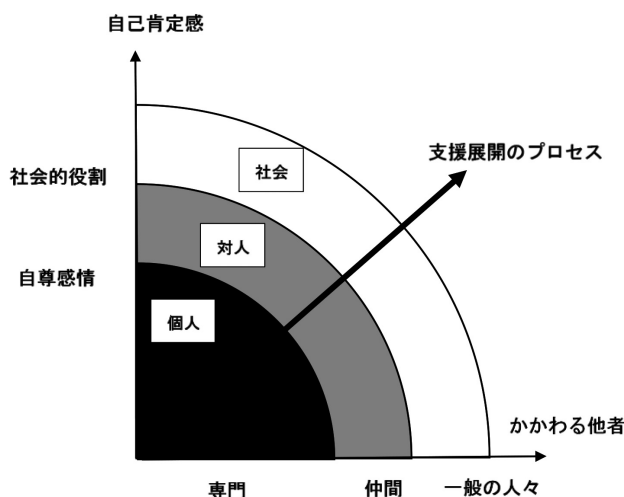
4.3 自己肯定感と関係する他者の拡張性

3点目は、支援の短期目標の拡張性に関する考察である。10年以上に及ぶ支援はピアサポーターの変容にあわせて形が変わる。4名のピアサポーターに対する支援は、変化する支援目標に通底する2つの軸が抽出された。

1つの軸は、クライアントの自己肯定感の変容に関する軸である。個人的次元の「リスク管理」に分類した「危機的状況での支え」や、「認知変容の促進」の「自分の状態や考え方、言動の肯定的側面への気づきを促す」等、パワーレスな状態にあるクライアントが、自分の存在を価値あるものとして信頼できる自尊感情の回復を支援している。個人と対人的次元の分類に苦慮した「仲間との活動を通じて肯定感や自信を得る機会の提供」も介入方法は異なるが、自己信頼や自尊感情を育てる支援と考える。それが社会的次元では、「社会的な活動の意義確認による活動参加への動機づけ」にみられるように、自身と社会の関係性をピアサポーターは考えるようになる。「内的なエンパワメントの領域を抜け出て」¹³⁾ 自らの社会的役割を考えることに変化する。

2つ目の軸は、ピアサポーターがかかわる他者の属性の広がりに関する軸である。個人的次元の「指導的かわり」や「動機づけ」、¹³⁾ 「認知変容の促進」

俯瞰図



断面図

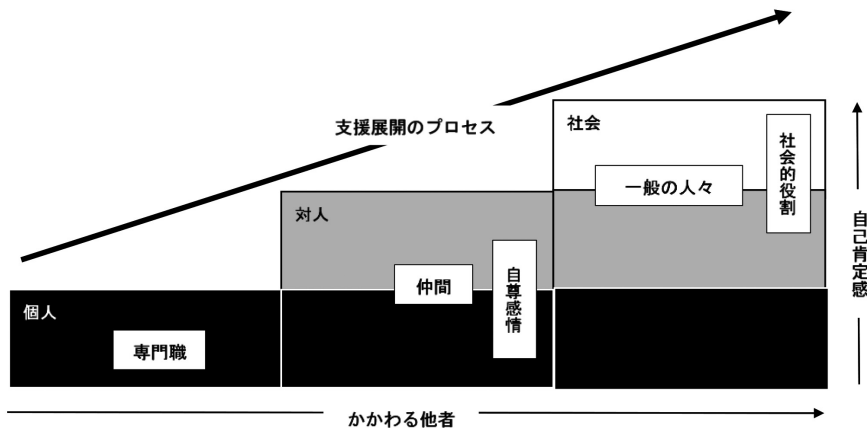


図1 ピアサポーターに対するエンパワメント実践の構造

は、すべてピアサポーターとソーシャルワーカーの二者間でおこなわれる。対人的次元では、同じ障害や類似する課題をもつ仲間との「グループ準備」や「相互作用の促進」が図られ、同質性の高い他者との交流が増える。そして、社会的次元の啓発活動や家族勉強会、行政が主催する会議では、同質性の低い一般の人々に対して活動をおこなう。個人から社会へと次元が進展することに伴い、ピアサポーターがかかわる他者の多様性が広がる。

5. 結論

本研究の目的は、ピアサポーターが社会にはたらきかける活動を継続する力を獲得するまでを支えたソーシャルワーカーによる実践の構造を、エンパワメント・アプローチで提示された個人・対人関係・社会的次元に依拠し可視化することであった。4名の活動継続するピアサポーターに対する支援を、個人・対人・社会的次元でストーリー化し、3つの次元の順序性や重複性、実践の展開に伴い拡張する自己肯定感と関係者について考察した。さらに可視化を図るため、考察をふまえてエンパワメント実践がもつ立体的な構造を、ここでは一先ず俯瞰図と断面図で示した(図1)。立体図の提示は、今後の課題としたい。

個人的次元から社会的次元へという順序性と、断面図で示した積み上げる形の重複性、そして俯瞰図で示した2つの軸に沿う拡張性を図式化した。個人・

対人的次元では自分の価値を確認する自尊感情を育み、社会的次元では社会的役割の遂行により得られるやりがいと自己肯定感の形が変容する。関わる人も受容を基本的姿勢としてもつ専門職から似た経験をもつ仲間、そして多様な価値観をもつ一般の人々へと拡張する。これは、偏見や抑圧を受けるリスクが高くなると捉えることもできる。しかし、エンパワメント実践の3つの次元の順序により得られた支え合う仲間や、社会活動に重複・並走しおこなわれるグループ活動や個人支援が、リスクを低減させ利益の享受を可能にする。

図1の構造をもつエンパワメント実践により、社会にはたらきかける力を獲得したピアサポーター4名の活動は今もなお継続している^{†8)}。こうしたかれらの活動は、本研究で明らかにしたエンパワメント実践の構造が、社会的活動を継続する力の獲得に影響を及ぼすひとつの事例である。

一方で本研究には限界がある。1点目は、エンパワメント実践の可視化のために限定した分析対象が、一事業所の利用者に偏るため、結果の普遍性を担保できないことである。もう1点は他の事例や場面への応用可能性である。本研究で明らかにした3つの次元や順序や重複性が、どのようなタイミングでどのような方法や言動により実践されるか本研究では明らかにできなかった。ソーシャルワーカーによるエンパワメント実践の拡大を目指すためには、さらなる可視化や検証が必要となる。

倫理的配慮

担当ソーシャルワーカーに対するインタビュー調査に関しては、筆者が当時在籍していた日本福祉大学の「人を対象にする研究倫理審査」(承認番号18-04)の承認を得て実施した。インタビューに関する説明・同意は、口頭及び書面の両方でおこない、担当ソーシャルワーカーの同意を得た。また、聴き取りの内容に4名のピアサポーターの個人情報が含まれるため、利用者を取り交わされたサービス利用契約書に基づき調査同意書を作成した。4名のピアサポーターには、調査同意書を用いて調査の目的と公表方法等を説明し、本人からの署名による同意を得て研究を実施した。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、社会福祉法人名張育成会のソーシャルワーカーに多大な研究協力をいただきました。インタビュー調査、分析作業を共同でおこない、本稿の内容の確認や修正にもご協力いただいた、多原智子氏、今西真由美氏、内田安俊氏、元永篤志氏、山中彩氏の5名の優れたソーシャルワーカーに心より感謝します。また、インタビュー調査への協力を快諾された担当ソーシャルワーカー、研究の主旨を理解し同意書を交わした4名のピアサポーターにも深謝します。

注

- †1) 中間報告では、精神障害者が可能なかぎり地域で生活することを推進するために、普及啓発、精神医療改革、地域生活支援という3つの重点施策を提示した。ピアサポートという用語は、地域生活支援施策のひとつ「気軽な相談機関や仲間・生きがいがづくり」に含まれる当事者同士の相談活動による支え合いの例として記述された。
- †2) 協議会メンバーへのピアサポーターの積極的な採用への示唆、地域移行推進員による退院に向けた相談や個別支援計画に基づく院外活動に係る同行支援等へのピアサポーターの活用が示されている。
- †3) 障害福祉サービスにおける質の高いピアサポート活動をめざした、ピアサポーターとかれらと協働する事業所の

- 管理者を養成する、基礎・専門・フォローアップの3つの研修事業。都道府県と指定都市、適切と認められ委託された事業所が実施することができる。
- †4) 障害福祉サービスの、自立生活援助、計画相談支援、障害児相談支援、地域移行支援、地域定着支援は、障害者ピアサポート研修を修了したピアサポーターを配置する等、一定の条件を満たすと、障害報酬に加算算定が可能になる。
- †5) 利用者に対して、一定の支援体制のもと就労や生産活動等への参加等に係るピアサポートを実施した場合に、当該支援を受けた利用者の数に応じ、各月単位で100単位を加算できる。
- †6) 本文中に記載した理由以外に、ピアサポーターとしての活動時間の確保や報酬の低さも中止理由としてあげられた。これらは、ピアサポーター配置の促進施策により軽減・解消されたと考え、本文中には記載しなかった。
- †7) 外れ値とした2つのセグメントは、「(支援への疑問)については所長にも何度も相談しましたが、本当によかったのかその後数年にわたって悩む」というソーシャルワーカーの内省に関するものと、クライアントが打ち明けられないことをソーシャルワーカーに相談する場面に関して、数名の研究メンバーが信頼関係以上の強い関係性を読み取ったが、支援の前提と認識するメンバーもあり、最後まで結論が出なかったため、分析対象から除外した。
- †8) 活動の一環として、ソーシャルワーカーを目指す学生のために面接トレーニングのクライアント役、エンパワメントを意識したはたらきかけの相手役として、専門職養成の一部に参加した。

文 献

- 1) 岩崎香, 秋山剛, 山口創生, 宮本有紀, 藤井千代, 後藤時子: 障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修の構築. 日本精神科病院協会雑誌, 36(10), 20-25, 2017.
- 2) 豊芯会: ピアサポートの活用を促進するための事業者向けガイドライン. 豊芯会, 東京, 2020.
- 3) 松本真由美, 上野武治: 精神障害者地域移行支援事業におけるピアサポートの効果—仲間的支援と熟達の支援の意義について—. 精神障害とリハビリテーション, 17(1), 60-67, 2013.
- 4) 小砂哲太郎, 水野健, 野村千佳: 精神科作業療法へのピアサポートの導入が精神科病院入院患者に与える影響—地域生活に対するイメージや行動の変化に着目して—. 東京作業療法, 5, 51-58, 2017.
- 5) 坂部ひかり, 三原功嗣, 奥田仁: 地域移行支援を導入した長期入院患者の退院—統合失調症患者の1事例を通して—. 日本精神科看護学術集会誌, 62, 448-449, 2019.
- 6) 山口創生, 水野雅之, 種田綾乃, 相田早織, 澤田宇多子, 小川亮: 障害福祉サービス事業所におけるピアサポーターの有無とアウトカムの関連—前向き縦断研究—. 臨床精神医学, 49, 277-288, 2020.
- 7) 千葉理恵, 宮本有紀, 川上憲人: 地域で生活する精神障害をもつ人のピアサポート経験の有無によるリカバリーの比較. 精神科看護, 38(2), 48-54, 2011.
- 8) 藤本裕二, 藤野裕子, 楠葉洋子: 地域で暮らす精神障害者のリカバリーに影響を及ぼす要因. 日本社会精神医学会雑誌, 22(1), 20-31, 2013.
- 9) 大堀尚美: 病院と地域の新たな連携—ピアサポーターとして生きる尊厳と生きる力を取り戻す—. 病院・地域精神医学, 61, 11-14, 2018.
- 10) 野瀬千亜紀, 高村裕子, 寺西宏晃: ピアサポーターを導入した長期入院患者への地域移行支援の取り組み—ピアサポーター自身のリカバリーに対する有効性—. 病院・地域精神医学, 60, 142-146, 2018.
- 11) 神林ミユキ: 精神障害者を対象としたエンパワメント実践プロセスの質的研究—ピアサポーターの言語化支援に着目した TEA 分析—. 社会福祉学, 62(2), 60-75, 2021.
- 12) 川村隆彦: ソーシャルワーカーの力量を高める理論・アプローチ. 中央法規, 東京, 2011.
- 13) 久保美紀: ソーシャルワークにおける Empowerment 概念の検討—Power との関連を中心に—. ソーシャルワーク研究, 21(2), 21-27, 1995.
- 14) プレンダ・デュボワ, カーラ・K・マイリー著, 北島英治監訳: ソーシャルワーカー人々をエンパワメントする専門職—. 明石書店, 東京, 2017.
- 15) 栄セツコ: 病の語りによるソーシャルワーカーエンパワメント実践を超えて—. 金剛出版, 東京, 2018.
- 16) 村方多鶴子: 精神障害をもつ女性が結婚・出産・子どもとの関わりを通して他者から受けたエンパワメントの主観的体験. 精神障害とリハビリテーション, 21(1), 78-84, 2017.
- 17) 眞野祥子, 山本智津子, 吉村公一: 精神看護における精神看護技術の傾向と今後の課題. 摂南大学看護学研究, 1(1), 43-50, 2013-3.
- 18) 山口弘幸, 山口弘美: 当事者主体によるピアサポート活動の推進と発展課題—セルフヘルプ活動と WRAP. 病院・地域精神医学, 55(2), 170-172, 2012-11-20.

- 19) 大高庸平, いたうたけひこ, 小平朋江: 精神障害者の自助の心理教育プログラム「当事者研究」の構造と精神保健看護学への意義—「浦河べてるの家」のウェブサイト「当事者研究の部屋」の語りのテキストマイニングより—, 日本精神保健看護学会誌, 19(2), 43-54, 2011.
- 20) 佐藤郁也: 質的データ分析法. 新曜社, 東京, 2008.
- 21) 平山尚, 平山佳須美, 黒木保博, 宮岡京子: 社会福祉実践の新潮流—エコロジカル・システム・アプローチ—. ミネルヴァ書房, 京都, 1998.

(2022年6月9日受理)

The Structure of Empowerment Practice: Through the Case of Peer Supporters

Miyuki KANBAYASHI

(Accepted Jun. 9, 2022)

Key words : empowerment, social work, peer supporter, mental disorder, structure of practice

Abstract

It is difficult for the people with mental disorders to continue peer support activities. It is possible only for those clients who have achieved social-level of empowerment to support their peers. The purpose of this study was to visualize the structure of social workers' practice that supported their empowerment. Data were collected from a semi-structured interview with the social worker and were analyzed using qualitative data analysis methods. The investigation demonstrated that social workers' practice was different in each stage of the empowerment approach. From these results, we made three considerations: first, the stages of empowerment proceed in order, second, there is continuity and overlap in those stages, and third, self-affirmation and stakeholders of clients gradually spread. The structure of empowerment practice with these characteristics was illustrated.

Correspondence to : Miyuki KANBAYASHI

Department of Social Work
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail : miyu-k@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.32, No.1, 2022 21–30)